

●日吉神社の樹林

小立野通りから三口新町方面へ進みます。

^{うっそう}鬱蒼とした木々に覆われた日吉神社があらわれます。参道右の大ケヤキは、樹高35m、幹周5mにもおよぶ巨木で、拜殿左のスギとともに、この神社の樹林を象徴しています。230本を超える大小さまざまな樹林が、緑の空間にさらなる緑陰を生成し、^{しゃそうりん}社叢林の風格を効果的に導き出しています。

●大桑橋かいわい

緩やかに続く通りから石引・野田線沿いを進みます。大桑橋から犀川左岸を上流方面に向かいます。

このかいわいは、桃や梨畑、田園が広がる^{のどか}長閑な一帯です。犀川沿いでは、5～6月頃になると、ニセアカシアが多くみられ、白い花が穂状に垂れて開き、辺りに甘い香りが漂います。野鳥は、サギ類などの水鳥だけでなく、右岸の崖地林から山野の鳥も飛来します。

●貝化石とおう穴

河原に下ります。犀川では、貝化石の宝庫そして全国的にも有名な「大桑層」(おんまそう)がみられます。この地層は、今からおよそ170万年前～80万年前のものとなれ、貝化石が厚さ数cm程度に密集したり、散在したりする層となっており、ヨコヤマホタテガイ、アカガイ、ウニなど約200種類の貝化石がみつ



ています。また、クジラやサメ、象(アケボノゾウ)の化石も発見されました。

砂岩からなる河床には、「おう穴」と呼ばれる直径10cm程度の丸い穴が数多くみられます。これは、水流による侵食でできた河床のくぼみに小石が入り込み、渦によって小石が回転することで、くぼみがえぐられ拡大したものです。

●河岸段丘の眺望

貝化石産地にちなんで名づけられた「大桑貝殻橋」を渡り、大桑簡易野球場横から涌波方面に抜ける急な坂を上ります。坂の途中からは、犀川左岸の河岸段丘が広く見渡せます。

●えんしょう坂から涌波堤公園へ

犀川大通りを渡り、小立野台地沿いに向かって歩を進めます。

えんしょう坂は、木製の曲がりくねった階段で、台地上の土清水方面に続いています。江戸時代、このあたりには土清水塩硝蔵つちちようずみんしょうくらという加賀藩の火薬製造施設があり、施設の中を流れる辰巳用水の水流を利用して火薬を製造していました。坂の名前は、火薬の材料の一つである塩硝えんしょうが越中五箇山からここまで運ばれていたことにちなんでいます。辰巳用水の分流が流れ込む涌波堤公園はちょうど塩硝蔵の北端にあたります。

●辰巳用水遊歩道

辰巳用水は、三代藩主前田利常が、寛永9年(1632年)に板屋兵四郎に設計させたもので、約12kmにもおよぶ用水を、わずか1年たらずで完成させました。藩政時代にもかかわらず、長い導水トンネルが掘られていること、勾配が200分の1を保っていること、低地から高地に水を引き揚げるための逆サイフォン工法を用いていることなど、極めて高く素晴らしい技術で造られていることは、他に例をみません。

その用水に沿って遊歩道が続いている辰巳用水遊歩道は、大桑町～錦町間の約2km、用水景観を楽しむだけでなく、野鳥や昆虫とのふれあいや野田山の眺望などが満喫できる自然豊かな散策路です。果樹園が広がり、ケヤキをはじめとする雑木林が日差しを遮り、そしてモウソウチクが深緑のトンネルを描き出しています。風景もさまざまに変化をみせ、季節によっても趣を変えます。シジュウカラが飛び交い、夏の夕刻にはヒグラシが涼しげに鳴き、クツワムシが秋の気配を知らせます。特に、初夏の夜を彩るホタルの明滅する様は、静かに流れゆく漆黒の水面に、線香花火を映し出したかのように情緒的です。



辰巳用水遊歩道

●八幡神社の樹林

遊歩道終点近く、右手の細い階段を上り、小立野通りを横断します。

八幡神社の樹林は、スギ、エノキ、シラカシなどの大木が境内を覆い尽くし、金沢の代表的な鎮守の森といえます。